

一九一四年にいたるイギリス騎兵と白兵突撃

根 無 喜 一

一、はじめに

第一次世界大戦に臨んで、欧州列強は攻勢優位戦略をその基本的構想としていた。防御側が圧倒的に優位であることは、大戦勃発後ただちに判明する⁽¹⁾。戦争は四年余も続く総力戦・消耗戦となり、ヨーロッパ文明そのものを根底から揺がすことになった。

本小稿では、英陸軍が攻勢優位論を保持し、展開した理由を解く鍵の一つとして、大戦にいたるイギリス騎兵の戦術に関する論議を考えてみたい。なぜなら騎兵は、常に精神主義を強調し、剣サベルと槍ランスで武装した白兵突撃(arme blanche)を強調する。彼らにとって、防御的騎兵戦術など夢想だにできるものではなかったからである。また、大戦中も西部戦線では、ダグラス・ヘイグおよび彼の参謀長も含めて司令官級九人のうち、五人までもが騎兵出身であった。陸軍部内で、数的にまったく限られた勢力でしかなかったにもかかわらず、騎兵は中世の騎士ジョを偶ばせる貴族主義的エリート集団として、部内では少なくない影響力を有していた⁽²⁾。一方、戦術の現実的側面では、一九世紀後半以降になると騎兵の伝統的役割は、ますます限定されたものになって行く。こうして、火力ファイアパワーを重視した騎兵戦術改革

が企図されるが、それは伝統派のまき返しによって、挫折させられてしまう。以下、こうした経緯を考えてみたい。

二、ブーア戦争（一八九九——一九〇二）と

ロバート卿の騎兵戦術改革

ブーア戦争当初の英遠征軍総司令官は、サーレッドヴァースリブラー將軍であつたが、この老英雄のもとで英軍は、緒戦より「ブラック・ウィーク」と呼ばれる一連の手ひどい敗北を喫することになる。こうして一九〇〇年一月から、陸軍元帥ロバート卿オウカンダハール卿が、遠征軍の指揮をとることになる。この結果、南アフリカでの英騎兵の運命は大きく変わることになった。ロバートは、広大な戦線と神出鬼没のブーア人義勇兵コマンドーに対処するためには、白兵突撃によるのではなく、機動力としての騎兵の機能を高めることが必要であると、考えていた⁽⁹⁾。

彼はその長期にわたるインド陸軍勤務の経験から、密集隊形の騎兵の白兵突撃に疑問を抱くようになった。第二次アフガン戦争中のカブール近郊のチャルダハール溪谷での苦い体験（一八七九、一一、一一）は、ロバートに、騎兵はライフルを携行して、徒歩戦を主としなければならないことを、痛感させていた⁽¹⁰⁾。駆歩する馬の鞍上から正確に射撃することは、技術的に困難であるところから、彼は徒歩戦を重視した⁽¹¹⁾。長射程のリー・エンフィールド銃を装備した乗馬歩兵が、南阿に派遣されたのは一九〇〇年初頭のことだった。「インペリアル・ヨーマンリー」と呼ばれたこの兵種の活躍が、やがてブーア人の降伏に一役買うことになる。戦争の第一年度以後、正規の騎兵からおおむね、剣と槍は引き上げられた⁽¹²⁾。ロバートの改革は、後にインド軍総司令官・陸相を経験するキッチナー卿、日露戦争観戦武官となるイワン・ハミルトン、ヨーマンリーに多くの影響力を有していたダンドナルド伯爵に支持された。しかし彼らは陸軍高官ではあつたが、いずれも騎兵プロバートの人々ではない⁽¹³⁾。

戦後ロバーツは、『騎兵操典』を徒歩戦中心に改変する。この仕事は騎兵の高紙将校に一任されたわけではない。彼は積極的にこの業務に取り組み、特に「序文」には自身筆を執るほどであった。「剣に従属する銃火器ではなくて、以後は剣がライフルに従属しなくてはならない。騎兵は専門の射撃手にならなければならぬし、常に下馬をして行動するよう訓練されねばならない」と、《銃主剣・槍従戦術》を強く打ち出す⁶⁰。「軍令三九号」（一九〇三、三）は、将来騎兵はその主要武器として、カービン銃、ライフルで装備することが定められた。突撃力としての剣の必要性は否定されはしなかった。ロバーツの改革は、騎兵を完全な乗馬歩兵に変えることを目指したものではなかったのである⁶¹。

実戦兵器としての槍は、基本的には放棄される。ただし、槍に関しては二つの重大な留保条件がつけられた。まず英本国では、王室が儀仗兵・護衛兵が儀式用に槍を携行することを強硬に主張したため、この用途に限り槍が認められた。またインドでは、対内的・治安維持のために、大英帝国の威信を誇示するために、槍は不可欠であると考えられていた。インドの事情を熟知していたロバーツは、こうしてインド陸軍の槍騎兵連隊を認めた⁶²。

さて、以上の点は二重の意味でロバーツの騎兵改革に不吉な影を投げかけることになる。彼が《銃主剣・槍従戦術》を執拗に主張したことは、誇り高き騎兵の伝統主義者達に改革に対するむき出しの感情的反感を蔓延させる。つぎに、植民地統活の必要上から、実戦武器としての槍を温存させたことや、英本国でも一部槍の使用を認めたことは、なし崩し的に槍が復活する可能性を残すことになる。

三、伝統主義者の論議と巻き返し

改革に反対する騎兵の高級将校達は、ブーア戦争での経験を、異常なもの・例外的なものとして斥ける。すなわ

ち、ヨーロッパ正面での軍事作戦にとって、植民地戦争で活躍した乗馬歩兵や対ゲリラ戦は、変則に過ぎなかった。彼らにとって乗馬歩兵は、苦しい非能率的な憶病かつ厄介なしろものであると映じていた。たとえばヘイグは一九〇〇年三月、姉に、「彼らへ乗馬歩兵は、乗馬することも、騎兵としての義務についても、何も知らないのです。……彼らのほとんどは、射撃が開始され、戦端が開かれんとする時、逃亡する有様なのです」と、書き送っている。そして彼は正規の騎兵に対して、「南アフリカで騎兵から、槍と剣を引き上げたことは、誤りであつたらう。なぜなら、騎兵の実際の活動は少なかつたけれども、それがブーア人の士気に与えた影響は測り知れない」と、賛美を忘れない⁹³。

実際、英騎兵は、少なかつたけれども、ある場合実に目ざましい活躍をしたように思われた。一九〇〇年二月ロバーツは、圧倒的に優勢な兵力と機動力をもって、キンバリーの包囲を解き、ブーア側のクローニー將軍をパーデバグで降伏させた。騎兵の機動力がその効果を示したことは事実であつた。興奮さめやらぬ同年四月六日の『ザ・タイムズ』紙上で、C・ボイル大佐は、「全体の光景は、騎兵の突撃がなし得たことの素晴らしい例証であつた」と、述べた。ヘイグも、「古来の物語は真実であつた。すなわち、念道義こそすべてなのであり、単なる砲ではなくて、それを用いることのできる人間こそが、帝国防衛のために望まれている」と、誇らしく述べている⁹⁴。サー・ジョン・フレッチの賛美者C・S・ゴールドマンも、同様の立場だつた⁹⁵。フレッチ自身も、ブーア戦争調査委員会で、「もし騎兵が、主としてライフルに依存するように教え込まれたとするならば、その士気は奪い取られてしまふであらう」と、発言する⁹⁶。こうして「コウルド^{白兵}ドリストイール」への全幅の傾斜は、伝統主義者にとっては、神秘的・宗教的信念にまで高められる⁹⁷。しかし、ロバーツがみごとに喝破したように、「ヘイグは戦争において、槍^{チャーム}を使用した経験がなかつたにもかかわらず、槍に固執している」⁹⁸のであつて、その議論はステレオタイプの・教条主義的に過ぎていた。ここで強調しておかねばならないが、キンバリー救出作戦の勝因は、騎兵の高級将校達が主張した点にあるので

はなくて、ロバーツの用意周到な戦略と用兵に求められるべきである⁽⁹⁾。

しかし英本国では、戦後の陸軍改革の嵐が吹きすさぶなか、老將軍ロバーツは、英陸軍史上最後の總司令官コマンドー・イン・チーフを辞す。一九〇四年二月のことだった。ロバーツは騎兵戦術改革への情熱をなおも持ち続けたが、この頃から彼の関心は徴兵問題に移行しつつあった⁽¹⁰⁾。一九〇七年一月二月、フレンチが「騎兵監」に就任してから、旧式の白兵突撃訓練が撤底される⁽¹¹⁾。こうした状況下騎兵は、「陸軍参事会」に圧力をかけ、ついで一九〇九年六月、「軍令一五八号」は、実戦的武器としての槍の復活を認める。こうして一九〇七年版の『騎兵操典』では、「効果的ではあるが、ライフルは馬匹のスピード、突撃の偉力、コールド・スティーガ、白兵の恐怖によってもたらされる効果に取って変わることはできないと、いうことは原理として認められるべきである。なぜなら、乗馬活動の機会が招来された時、こうした特質は相互に結びついて、騎兵にとって不可欠である急襲力、情熱、道徳的優位を鼓舞するからなのである」と、記載される⁽¹²⁾。

もちろんこの『操典』は、一九一二年、白兵突撃への強調点をいく分修正して、新たに発行される。しかし全体として考える時、「イギリス騎兵は、ブーア戦争に突入したのと同じ状態で第一次世界大戦に突入した」⁽¹³⁾ことは否定できない。

四、騎兵戦術改革挫折をめぐって

——ホールデン改革を中心に——

騎兵改革挫折の問題を考えるのに際して、今世紀初頭の英陸軍改革——ホールデン改革——が重要である。ホールデン陸相により、英陸軍は組織化・専門化・効率化される。当然その過程でロバーツ等の前時代的な組織のなかで活躍した人々は、人事面で冷遇され、官僚主義的専門家達が台頭する。前者は、「素人」的であるかも知れないが、官

僚的弊害に陥ることなく大局的、大戦略的にものごとを把握することができた。後者は、より「女人」的ではあるが、むしろそれ故にこそ、全般的潮流を見失なう恐れがあった。そして後者に騎兵将校ダグラス^{II}ヘイグが属していたのである。ヘイグは専門家として、その持論を十分に展開し、陸軍首脳を説得することができた。

ブーア戦争での思いがけない苦戦は、なんびとの眼にも陸軍の抜本的な改変が必要急務であることを焼きつける。改革の過程で特にエシヤ^{II}卿主催の「陸軍再建委員会」(通称[△]エシヤ^{II}委員会)が、重要である。エシヤ^{II}は、かつて大規模な陸軍改革案を答申したハーティントン侯の秘書を、サー・G・クラークと共に務めた人物である。エシヤ^{II}は、ハ侯の改革路線に沿って、その要諦は、陸軍組織を陸相のもとに一元化することであり、そのためには、ウエリントンの陸軍の象徴とも言える総司令官府の廃止が絶対条件であると、考えていた。一九〇三年秋、バルフォア^{II}保守党内閣のもとで、この委員会は、ポーツマス海軍工廠司令官サ^{II}ジョン^{II}フィッシャー提督、前ヴィクトリア州総督G・クラーク、書記官としてジェラード^{II}エリソン中佐、それにエシヤ^{II}を構成員として発足する。フィッシャーが成員であったのは、ハ侯が目指したのと同様、エシヤ^{II}が海軍省の委員会制度を参考にしたいと考えていたためである。

委員会の答申は、一九〇四年一月一日から、同年三月九日まで三度にわたって明らかにされる。これはかなり敏速な処置であった。答申案は、陸軍省内での合議機関、「陸軍参事会」[△]の創設、陸相の管理化で参謀総長を長とし、作戦部、訓練部、服務部で構成される「参謀本部」の設置、そしてこれと逆比例して「総司令官府」の廃止を主内容としていた。バルフォアの「特許状」と「参事会令」とにより、陸軍参事会が発足する。総司令官府はついにその歴史的使命を閉じた。ただし参謀本部の充実は、レーム^{II}ダック現象を呈していたこの政権下では不可能であった[△]。

ところでこの改革は、組織内の大規模な人事刷新をその内容とする以上、さまざまな圧力に遭遇することが予想さ

れた。こうしてエシャーは答申案作成を急ぎ、その実施は一種「青天の霹靂」となった。一九一〇年より参謀本部作戦部長となる（後年元帥）ヘンリー・ウィルソンはその一九〇四年二月一日の日記で作戦部長にジェイムズ・A・グリースンが抜擢されたことに關して、「三巨頭（エシャー、フィッシャー、クラーク——筆者）は、気が狂ったようにことを進めている。今朝、私がニック・ヘウィリアム・ニコルソン、一九〇八——一九一二、参謀総長、一九〇九年二月よりは「帝国参謀総長」——筆者）の部屋で話し合っていた時、ジミー・グリースンが入って来て、自分はエシャーにニックのアフィスを主管するように……命じられたと、述べた。ニック自身は何も知らされていなかった。……これはきわめて問題の多いことである」と、記している。

この「気の狂ったような」「問題の多い」改革を受け継ぎ推進・成就することになるのが、一九〇五年末に成立したキャンベル・バナーマン自由党内閣のホールデン陸相であった。ホールデン改革は、従来考えられていたようにに、当初よりつぎの大戦争を念頭において、マスター・プランを持って、順調に計画通りに着着と、遂行されたわけではない。J・グーチ、S・R・ウィリアムソン、H・ストラナヤンの最近の研究が明らかにしているように、明確に戦時の目標を設定した改革が、平時に容易に断行できるとは考え難い。たとえば、与党自由党は陸軍予算削減を強硬に求めていたし、陸軍部内の古い体質は、改革に深い疑念を示していた。改革はさまざまな圧力、摩擦のなかをかいくぐって進まねばならなかったのである。

ホールデンはさまざまな術策・讓歩等を通して、摩擦を極小化しようとする。たとえば、ボランティア、ヨーマンリー、ミリティアといった不正規軍を、地域的基礎の上に組織化し・統合して国土防衛軍を創設するためには、貴族であり守旧派であったそれらの高級將校を説得し、懐柔する必要があった。その際、王室の權威は必須だと考えられたから、ホールデンは王室に接近しなければならなかったのである。また、国土防衛軍創設や参謀本部の機能充実のためには、若手の軍事専門家の見解が求められる。彼らには「しがらみ」がなかった。それにこうした人々を腹

心の部下・与党にひき入れることで、改革の運動には機動性が与えられる。ニコルソン、エリソン、ヘイグ等のこうしたグループは、「若手将校の新学派」と呼ばれた気鋭の人々であった。

騎兵戦術改革との関連で、新人事におけるヘイグの動向に注目したい。なぜなら彼こそは、陸軍部内で強固な地位を確立しつつその影響力を駆使して、ロバーツ改革を転覆させることに成功した人物だからである。すでに新生参謀本部訓練部長^㉔であったヘイグの抜群の行政手腕を、ホールデンは高く評価していた。彼はエンシャーに、「ダグラス^㉕は前侍従武官で、その経験は陸相と王室とのパイプ役として、欠くことができないと、思われた^㉖。かくてヘイグは一九〇七年一月、服務部長に就任した。部内での権能上の対立から、デッドロックに乗り上げていた『野外勤務令、第二部』を一九〇八年に出すことに成功する。ここでは参謀本部の強力な権限が明示されていた^㉗。こうしてヘイグは、ホールデンの期待通り、英陸軍の組織化、参謀本部の機能充実に大きく貢献する。彼は徒歩戦の必要性、他の兵種との共同の不可欠性も、十分認めつつも、「突撃の機会は稀であろう。しかしそれは起る。突撃の効果は絶大であって、それ故、突撃は常に我々の理想であり、最終目標なのである」と、伝統的戦術論を執拗にくり返す^㉘。そうしてホールデンと参謀総長サーロウリアムニコルソンの支持を受けて、彼は騎兵の参謀旅行組織化に着手し、こうした過程で反ロバーツ改革に辣腕をふるった^㉙。さて新人事について補足しておきたい。オールダーショット司令官となったフレンチの副官は、エンシャーの子息であった。こうした人脈のなかで、フレンチは「陸軍参事会」に槍の復活を働きかけた^㉚。かくしてヘイグがインド軍総司令官（一九〇九—一二）として赴任するのと前後して出された「軍令一五八号」は、既述の通り、槍を復活した。

ロバーツ派の人々が騎兵出身者でなかったことも、この改革失敗の重要な理由である。ロバーツ自身砲兵出身であった。改革は、騎兵部内に同調者を見い出されない限り、困難な壁に遭遇することは十分予想できた^㉛。ところで

《銃主劍徒戰術》の頑強な主張は、騎兵の反感を買い、現場の激しい抵抗を受けた。こうして現場では改革の持つ微妙な寸隙にも、伝統戦術を流し込もうとした。たとえば前述したように、英本国で儀式用に槍の携行を認めたことは、槍の訓練が必要であるという主張を、騎兵側が行ない得る余地を与えることになった。訓練と演習の線をどこで引くか、それほど明確でない以上、いくつかの騎兵連隊は、運用面でなくずし的に、訓練にやがて旅団・師団演習に、槍をとり入れはじめる。その場合当局は、「軍令」違反を問うよりも、事実を追認する傾向があった⁶⁰。

それにロバーツの影響下、改革を熱心に主張した人々は、軍の部外者である場合があった。たとえば辛辣な理論家であったエルスキントナルダースは、「白兵突撃は将来戦において、何ものをも達成しないであろう」と、激しく、そして全面的に伝統的戦術を否定した⁶¹。こうしたアマチュアの極端な見解に対して、騎兵側は、よりマンツの襟を立て、警戒心を深め、伝統的見解を固持したように思われる⁶²。

さらにロバーツの改革は、ブーア戦争の緊急時になされたことは、忘れられるべきではない。平時の軍事技術上の改変ほど困難なものはないし、ブーア戦争では、騎兵の果たした役割の少なさから、その戦術に関して明快な結論を引き出すことは困難であった。改革派、伝統派はそれぞれ自分に都合のいい論理を展開することが可能であった⁶³。この意味で伝統派の巻き返しは十分強固たり得た。

最後に、この時代の軍事的保守主義について触れておく必要があるだろう⁶⁴。実際、貴族主義的なエトスを有していた騎兵は、その過去へのはかり知れない情緒的ノスタルジアを感じていた。しかし問題は、フレデリック・モリス大佐やF・R・ヘンダーソン大佐と言った開明派で騎兵出身ではない人々が、騎兵対乗馬歩兵論・白兵突撃対徒歩戦論において、必ずしも明確な立場をとらなかつたことである。モリスは、「突撃の成功は……お互いに密集して、人馬一体となつての激しいパワーと道義的効果にかかつて」と、述べている。ロバーツも徹底的な槍廃止論を展開したわけではない。こうしたあいまいさの背後には、チルダースも含めて、一八七〇年から一九一四年の間に、すでに

着実に進行していた「二〇世紀的戦争」に対する認識が不十分であったという理由——認識したくないという理由——が存在した。彼らにとって、マシンガンや速射砲の発達、塹壕の進歩、夥しい有刺鉄線、航空機の出現、これらの新軍事技術が、移動の手段としての機能以外を馬匹から奪い去りつつあるという現実には、理解を越えるものであつたらう。それは騎兵の優雅なアナクロニズムに新しい生命力を吹きこんだ。

五、おわりに

軍事的保守主義、さまざまな摩擦のなかで行なわれたホールデン改革、陸軍省内での新人事によるヘイグら有力な伝統的騎兵スポークスマンの台頭、が改革失敗の過程で重要であつた。そして伝統派の勝利は、騎兵の突撃精神に新しい活力を与え、攻勢優位論・短期決戦論を、浸透させる一契機となつたように思われる^{四〇}。客観的軍事情勢は、戦争の全体化、長期化、火力・塹壕の強化による防側側の圧倒的優位をもたらしていたにもかかわらずである。

しかしそのことで、ただちに当時の軍事関係者を非難することはできない。質的に異なつた時代の倒来を読むことは、決して容易なことではないはずである。それに、馬匹や白兵戦への愛着は、戦争や社会の機能化・非人間化への、むなしいが、理解することのできる抵抗であつたと、考えられる。ブライアン・ポンドが言うように、一九一八年以後も騎兵突撃を主張する人々は、頑迷なドン・キホーテとして非難できよう^{四一}。しかし第一次世界大戦前、日本ではようやく明治が最後の段階に入ろうとしている時、イギリスではヴィクトリア朝陸軍の旧きよき名残りが濃厚であつた時、騎兵戦術に関する議論が示した問題は、単純に一刀両断できる性質のものではない。それ故、チャーチルの小々皮肉っぽい言葉は、回顧趣味につきるものではないであらう。

従来、残酷であるが壮麗でもあつた戦争は、今や惨酷汚穢なものになつた。まったく嫌なものになつてしまつた。

これみな、デモクラシーと科学の罪と言わずして何ぞや。このおせっかい者というか、攪乱者が、実戦に参加することを許された瞬間から、戦争の運命は決した⁶⁸⁾。

- 註 (1) 永井陽之助 「攻勢と防衛——乃木將軍は愚将か」『現代と戦略』文芸春秋 昭和六〇年、二九五—三二六ページ。Michael Howard, "Men Against Fire: Expectations of War in 1914", Stephen E. Miller (ed.), *Military Strategy and the Origins of the First World War*, U. S. A., 1985, pp. 41-57. Stephen Van Everna, "The Cult of the Offensive and the Origins of the First World War", *ibid.*, pp. 58-107. Brian Bond, *War and Society in Europe, 1870-1970*, Fontana Paperbacks, 1984, pp. 92-93.
- (2) Gerald De Groot, 'Educated Soldier or Cavalry Officer? Contradictions in the pre-1914 Career of Douglas Haig', *War and Society*, vol. 4, No. 2, September, 1986, pp. 52-53, 67.
- (3) *ibid.*, p. 56. キンズリー救出作戦の経緯、ロビンソンが示した点を指摘。
- (4) Edward M. Spiers, "The British Cavalry, 1902-1914", *Journal of the Society for Army Historical Record*, 157, 1979, pp. 71-72.
- (5) De Groot, *op. cit.*, p. 59.
- (6) B. Bond, 'Doctrine and Trainings in the British Cavalry, 1870-1914', M. Howard (ed.), *The Theory and Practice of War*, U. K., 1965, pp. 107-108. 本書よりエッセイ「七〇歳記念論文集。一九七五年インデペンデンス記念文集」への再版内容。
- (7) E. Spiers, *op. cit.*, p. 71.
- (8) *ibid.*, p. 74. De Groot, *op. cit.*, p. 59. B. Bond, *op. cit.*, p. 112.
- (9) De Groot, *op. cit.*, p. 60. B. Bond, *op. cit.*, p. 111. E. Spiers, *op. cit.*, p. 74.
- (10) E. Spiers, *op. cit.*, pp. 74-75.
- (11) *ibid.*
- (12) B. Bond, *op. cit.*, p. 109.

- ㉔ De Groot, *op. cit.*, pp. 55-58.
- ㉕ E. Spiers, *op. cit.*, p. 75.
- ㉖ De Groot, *op. cit.*, p. 60.
- ㉗ B. Bond, *op. cit.*, p. 112.
- ㉘ De Groot, *ibid.*
- ㉙ De Groot, *op. cit.*, pp. 55-58.
- ㊱ B. Bond, *op. cit.*, p. 116.
- ㊲ *ibid.*, pp. 114-115, 117.
- ㊳ E. Spiers, *op. cit.*, p. 77.
- ㊴ *ibid.*, p. 79. E. Spiers, *The Army and Society, 1815-1914*, U.K., 1980, p. 282.
- ㊵ *ibid.*, pp. 250-253.
- ㊶ Thomas Gallowa Fergusson, *The Development of a Modern Intelligence Organization: British Military Intelligence, 1870-1914*, Ph. D. thesis, Duke University, 1981, p. 352. 本書では従来諜報史の史料として用いられてきた多くの歴史資料を
一穴の因書種に於て用いた。T. G. Fergusson, *British Military Intelligence, 1870-1914*, Arms and Armour Press, 1984.
- ㊷ 従来『新編』 Cyril Falls, 'Haldane and defence', *Public Administration*, 35 (1957), p. 248. R. Blake(ed.), *The Private Papers of Douglas Haig, 1914-1918*, London, 1952, p. 21. 従来『新編』 J. Gooch, *The Plans of War: The General Staff and British Military Strategy c. 1900-1916*, London, 1974, p. 166. S. R. Williamson, *The Politics of Grand Strategy: Britain and France Prepare for War, 1904-1914*, Harvard U.P., 1969, p. 100. K. Robbins, *Sir Edward Grey: biography of Lord Grey of Falloden*, London, 1974, pp. 178-9. 従来『新編』 E. Spiers, *op. cit.*, pp. 269, 285. 以後
同じく Hew Strachan, 'The First World War: Causes and Course', *Historical Journal*, 29, 1 (1980), pp. 243-
244. 『新編』の参考。
- ㊸ E. Spiers, *op. cit.*, pp. 273-274.
- ㊹ *ibid.*, p. 275. B. Bond, 'Richard Burdon Haldane at the War Office, 1905-1912', *The Army Quarterly and Defence Journal*, LXXXVI, 1963, p. 40.

- (35) *ibid.*, p. 38. E. Spiers, *op. cit.*, pp. 271, 274-275.
- (36) T. Ferguson, *op. cit.*, pp. 217, 351 ff.
- (37) E. Spiers, *Haldane: an army reformer*, U. K., 1980, p. 150.
- (38) E. Spiers, *op. cit.*, pp. 151-152. *Army and Society*, p. 281.
- (39) E. Spiers, *Haldane: an army reformer*, p. 153.
- (40) E. Spiers, 'The British Cavalry, 1902-1914', p. 77.
- (41) De Groot, *op. cit.*, p. 60.
- (42) E. Spiers, *op. cit.*, p. 78. スパイアーズは、陸軍参事会が一九〇二年に英本国では、儀式用のみ、インドではすべての場合に槍を認めたことについて記している。が、陸軍参事会の成立は一九〇四年二月のことなので、これは多分誤りであるように思われる。
- (43) B. Bond, *op. cit.*, pp. 116, 118-119, 124.
- (44) 伝統派と改革派の論議とそれに基づく變遷について Cf. E. Spiers, *op. cit.*, pp. 72, 76, 79.
- (45) E. Spiers, *op. cit.*, p. 79.
- (46) B. Bond, *op. cit.*, pp. 118-120. *War and Society, 1870-1970*, pp. 50-51.
- (47) E. Spiers, *Army and Society*, pp. 208-209.
- (48) B. Bond, 'Doctrine and Fraining in the British Cavalry', p. 120.
- (49) W・チャールズ 中村祐吉訳『わが半生』角川文庫 昭和四一年(四版)七八ページ。

— 文学部専任講師 —